

# 1. 全日本柔道形競技大会の実態把握に関する調査研究

講道館 桐生 習作  
講道館 大辻 広文

キーワード：柔道、形、全日本柔道形競技大会

## 1. Fact-finding study of the All Japan Judo Kata Championship

Shusaku KIRYU (Kodokan Judo Institute)  
Hirofumi OTSUJI (Kodokan Judo Institute)

Key words : *judo*, *kata*, All Japan Judo Kata Championships

### Abstract

This study reviewed the literature to elucidate the development of *kata* competitions in Japan, with the aim of obtaining basic knowledge to be applied in the future dissemination of *kata* instruction. Information was extracted from articles and other documents related to the All Japan Judo Kata Championship. The following information was clarified.

1. The All Japan Judo Kata Championship was the first national *kata* competition in Japan, and the first competition was held at the Kodokan Judo Institute in 1997, following a proposal by the Educational Promotion Committee of the All Japan Judo Federation.
2. The All Japan Judo Kata Championship was held 23 times between 1997 and 2022 (excluding 2007, 2020, and 2021) at the Kodokan Judo Institute.
3. Support has been provided by the Japan Judo Therapist Association (1997–2022), the Asahi Shimbun (1997–2019), the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (2001–2015), and the Japan Sports Agency (2016–2022).
4. The number of *katas* to be performed was three for the 1st championship (1997), four for the 2nd through 10th championships (1998–2006), and seven for the 11th championship (2008) and thereafter.
5. The number of participant pairs was lowest in the 1st championship (1997) with 30

pairs (60 competitors) and highest in the 22nd championship (2019) with 97 pairs (194 competitors).

6. The number of judges per *kata* was highest in the 2nd championship (1998) at 10 and lowest in the 11th championship (2008) at 5.
7. The total number of participant pairs across all competitions (1997–2022) was 1,432 (2,864 competitors) and the total number of judges was 746.
8. The number of mats was one in the 1st and 2nd championships (1997–1998), two in the 3rd through 10th championships (1999–2006), and three in the 11th championship (2008) and thereafter.
9. The Kodokan Judo Institute's competition rules have been used since the 16th championship (2013).

Nearly all quantifiable aspects of the All Japan Judo Kata Championship have shown increasing trends, suggesting that the scale of the competitions is expanding. In future work, we will investigate the status of international *kata* championships in order to clarify global trends in *kata* competitions.

## I. はじめに

嘉納は「柔道の形といふものは、恰も文章に於ける文法の如きもので、亂取に於ける文法の如きもので、亂取は即ち作文の練習の如きものであるからである。即ち文章をかくときに、文法の知識を必要とするが如く、亂取にも亦、形を必要とする。如何に文法に精通したとて、直ちに名文が書けないと共に、又、文法を知らずに、むやみに文章を書いても、正しき文章は出来難い。これと同じことで、柔術においても亦、形を學ばんでは、どうしても、攻撃防禦のあらゆる方面のことについて會得し、又熟練することは出来難い」<sup>1)</sup>と述べ、形と亂取の関係を文法と文章に譬え、両者を偏廢することなく同等に重んじるべきだと説いている。しかしながら、師範の生前から亂取は盛んに行われてきたものの、形の修行は閑却されてきた。小俣は形普及の動機づけが困難であった理由について、昇段審査や亂取競技大会でのデモンストレーションなど、専門性を発揮する場が限られていたことを挙げている<sup>2)</sup>。

日本では生涯柔道の観点から形の普及を図るべく、1997（平成9）年に全日本柔道形競技大会の開催に踏み切った。2007（平成19）年には第1回講道館柔道形国際競技大会、2009（平成21）年にはマルタにて第1回世界柔道形選手権大会（以下世界形）が開催されるなど、形競技の国際化が進んでいる。しかしながら、形競技大会に関する研究は、大島<sup>3)</sup>が国際形競技大会について触れているものの、国内大会についての報告は管見の限り見当たらない。毛利は形競技の評価方法、審査員の技量、教本などの課題を挙げ、競技化が形の本質を損なうとの批判を述べている<sup>4)</sup>。形の普及と発展のためには批判に向き合い改善していく姿勢が重要であるが、批判には根拠となる資料が必要である。健全な批判、議論、改善のサイクルを生むためには、まず柔道発祥国である日本で20年以上行われてきた全日本柔道形競技大会の実態を把握し、柔道関係者の中で共有することが急務であると考えられる。そこで本研究では、全日本柔道形競技大会を対象とし、形競技大会のシステムが構築されていく過程を明らかにし、今後の形普及のための基礎資料作りを目的とした。

## II. 方法

### 1. 対象

本研究は文献学的手法を用い、講道館の機関誌「柔道」に掲載された全日本柔道形競技大会の関連記事32点<sup>5-35)</sup>を資料とした。調査対象は、第1回大会(1997)から第23回大会(2022)までの23大会とした。

### 2. 項目の選定

先行研究<sup>36)</sup>を検討したところ、大島は4項目(参加国、各種目の優勝国、競技種目、審査員)を用い、4つの国際大会の比較検討を行っていた。本研究の目的は全日本柔道形競技大会の大会規模や実態の把握を優先するため、国や地域、競技成績は含めず、以下の10項目とした。文献資料から11項目についての情報を抽出した。

- ① 回  
大会が開催された回数。大会主催者が特に定めていないため、本稿では通算の大会回数を  
用いた。
- ② 年  
大会が開催された和暦と西暦の年月日
- ③ 会場  
大会が開催された場所
- ④ 主催  
大会の主催団体名
- ⑤ 後援  
大会の後援団体名
- ⑥ 種目数  
大会で実施された形競技の種目数
- ⑦ 参加組  
大会に参加した選手の組数(1組は、取1名と受1名の計2名)
- ⑧ 試合場数  
形の演技が行われる試合場の数
- ⑨ 表彰  
表彰される対象とその数
- ⑩ 審査員数  
大会での審査員数の合計、()内は各種目の審査員数

## III. 結果

「柔道」の全日本柔道形競技大会関連記事(32点)から10項目を抽出し、表にまとめた(表1参照)。

- ① 回  
第1回大会は、1997(平成9)年に開催された。1997(平成9)年から本調査を行った2022(令和4)年12月現在までに行われた大会の数は23回であった。大会が実施されなかった年

と理由については以下の通り。

- ・2007（平成19）年 第1回講道館形国際大会開催のため
- ・2020（令和2）年 新型コロナウイルス感染症対策のため
- ・2021（令和3）年 新型コロナウイルス感染症対策のため

② 年月日

全日本柔道形競技大会の開催月を比較すると、最も多く開催されたのは10月で15回（第4、6～15、19～22回大会）、次いで9月が5回（第1、2、3、5、16回大会）、11月が2回（第17、18回）、6月が1回（第23回大会）であった。

③ 会場

全日本柔道形競技大会の会場は、講道館での開催が23回（第1～23回大会）で、他の会場で開催されたことはなかった。

④ 主催

主催団体は講道館と全日本柔道連盟（以下全柔連）が23回（第1～23回大会）で、他の団体はなかった。

⑤ 後援

後援団体は、日本柔道整復師会が23回（第1～23回大会）と最も多く、朝日新聞社が22回（第1～22回大会）、文部科学省が14回（第5～18回大会）、スポーツ庁が5回（第19～23回大会）であった。

⑥ 種目数

種目数は、7種目が13回（第11～23回大会）と最も多く、4種目が9回（第2～10回大会）、3種目が1回（第1回大会）であった。種目数の推移をみると、第1回大会（1997）は「投の形」「柔の形」「古式の形」の3種目が実施され、第2回大会（1998）では前大会で実施されなかった「固の形」「極の形」「講道館護身術」「五の形」の4種目が実施された。第3～10回大会（1999～2006）は4種目実施となり、「投の形」「極の形」「柔の形」「古式の形」と「投の形」「固の形」「講道館護身術」「五の形」が交互に実施された。

⑦ 参加組

参加組数は、第22回大会（2019）が97組（194名）と最も多く、第1回大会（1997）が30組（60名）で最も少なかった。参加組の延べ数は1432組（2864名）であった。

⑧ 試合場数

試合場数は、1試合場での実施が第1～2回大会（1997～1998）、2試合場での実施が第3～10回大会（1999～2006）、3試合場での実施が第11～23回大会（2008～2022）であった。

⑨ 表彰

上位の表彰は、各種目及び地区の上位2組までが第1～4回大会（1997～2000）、各種目及び地区の上位3組まで第5～22回大会（2001～2019）、各種目の上位3組までが第23回大会（2022）であった。参加組に与えられる参加証は、第1～9回大会（1997～2005）で実施された。

⑩ 審査員数

審査員数は、第2回大会（1998）が40名（1種目10名）と最も多く、第1回大会（1997）が27名（1種目あたり9名）で最も少なかった。第3～10回大会（1999～2006）が28名（1種目あたり7名）、第11～23回大会（2008～2022）が35名（1種目あたり5名）であっ

表1 全日本柔道形競技大会（第1～23回大会）の項目一覧

回	年月日	会場	主催	後援	種目数	投	固	極	柔	護	五	古	参加組	地区枠	全国枠	推薦枠	試合場数	表彰	審査員数 (種目毎)
1	1997 (平成9) 年 9月27日	講道館	講道館・全柔連	日本柔道整復 師会 朝日新聞社	3	○			○			○	30	30	無し	無し	1	各種目上位2組 地区上位2組 参加証	27 (9)
2	1998 (平成10) 年 9月27日	講道館	講道館・全柔連	日本柔道整復 師会 朝日新聞社	4		○	○	○	○			40	40	無し	無し	1	各種目上位2組 地区上位2組 参加証	40 (10)
3	1999 (平成11) 年 9月26日	講道館	講道館・全柔連	日本柔道整復 師会 朝日新聞社	4	○		○	○			○	40	40	無し	無し	2	各種目上位2組 地区上位2組 参加証	28 (7)
4	2000 (平成12) 年 10月1日	講道館	講道館・全柔連	日本柔道整復 師会 朝日新聞社	4	○	○		○	○			40	40	無し	無し	2	各種目上位2組 地区上位2組 参加証	28 (7)
5	2001 (平成13) 年 9月30日	講道館	講道館・全柔連	文部科学省 日本柔道整復 師会 朝日新聞社	4	○		○	○			○	40	40	無し	無し	2	各種目上位3組 地区上位3組 全組に参加証	28 (7)
6	2002 (平成14) 年 10月13日	講道館	講道館・全柔連	文部科学省 日本柔道整復 師会 朝日新聞社	4	○	○		○	○			40	40	無し	無し	2	各種目上位3組 地区上位3組 全組に参加証	28 (7)
7	2003 (平成15) 年 10月19日	講道館	講道館・全柔連	文部科学省 日本柔道整復 師会 朝日新聞社	4	○		○	○			○	40	40	無し	無し	2	各種目上位3組 地区上位3組 全組に参加証	28 (7)
8	2004 (平成16) 年 10月17日	講道館	講道館・全柔連	文部科学省 日本柔道整復 師会 朝日新聞社	4	○	○		○	○			40	40	無し	無し	2	各種目上位3組 地区上位3組 全組に参加証	28 (7)
9	2005 (平成17) 年 10月16日	講道館	講道館・全柔連	文部科学省 日本柔道整復 師会 朝日新聞社	4	○		○	○			○	40	40	無し	無し	2	各種目上位3組 地区上位3組 全組に参加証	28 (7)

回	年月日	会場	主催	後援	種目数	投	固	極	柔	護	五	古式	参加組	地区枠	全国枠	推薦枠	試合場数	表彰	審査員数 (種目毎)
10	2006 (平成18) 年 10月22日	講道館	講道館・全柔連	文部科学省 日本柔道整復 師会 朝日新聞社	4	○	○			○	○		40	40	無し	無し	2	各種目上位3組 地区上位3組	28 (7)
11	2008 (平成20) 年 10月26日	講道館	講道館・全柔連	文部科学省 日本柔道整復 師会 朝日新聞社	7	○	○	○	○	○	○	○	70	70	無し	無し	3	各種目上位3組 地区上位3組	35 (5)
12	2009 (平成21) 年 10月25日	講道館	講道館・全柔連	文部科学省 日本柔道整復 師会 朝日新聞社	7	○	○	○	○	○	○	○	70	70	無し	無し	3	各種目上位3組 地区上位3組	35 (5)
13	2010 (平成22) 年 10月31日	講道館	講道館・全柔連	文部科学省 日本柔道整復 師会 朝日新聞社	7	○	○	○	○	○	○	○	73	69	4	無し	3	各種目上位3組 地区上位3組	35 (5)
14	2011 (平成23) 年 10月23日	講道館	講道館・全柔連	文部科学省 日本柔道整復 師会 朝日新聞社	7	○	○	○	○	○	○	○	78	70	4	4	3	各種目上位3組 地区上位3組	35 (5)
15	2012 (平成24) 年 10月21日	講道館	講道館・全柔連	文部科学省 日本柔道整復 師会 朝日新聞社	7	○	○	○	○	○	○	○	79	70	4	5	3	各種目上位3組 地区上位3組	35 (5)
16	2013 (平成25) 年 9月23日	講道館	講道館・全柔連	文部科学省 日本柔道整復 師会 朝日新聞社	7	○	○	○	○	○	○	○	83	70	5	8	3	各種目上位3組 地区上位3組	35 (5)
17	2014 (平成26) 年 11月22日	講道館	講道館・全柔連	文部科学省 日本柔道整復 師会 朝日新聞社	7	○	○	○	○	○	○	○	81	70	6	5	3	各種目上位3組 地区上位3組	35 (5)

回	年月日	会場	主催	後援	種目数	投	固	極	柔	護	五	古式	参加組	地区枠	全国枠	推薦枠	試合場数	表彰	審査員数 (種目毎)
18	2015 (平成27) 年 11月21日	講道館	講道館・全柔連	文部科学省 日本柔道整復 師会 朝日新聞社	7	○	○	○	○	○	○	○	82	70	6	6	3	各種目上位3組 地区上位3組	35 (5)
19	2016 (平成28) 年 10月23日	講道館	講道館・全柔連	スポーツ庁 日本柔道整復 師会 朝日新聞社	7	○	○	○	○	○	○	○	87	70	6	11	3	各種目上位3組 地区上位3組	35 (5)
20	2017 (平成29) 年 10月23日	講道館	講道館・全柔連	スポーツ庁 日本柔道整復 師会 朝日新聞社	7	○	○	○	○	○	○	○	87	70	6	11	3	各種目上位3組 地区上位3組	35 (5)
21	2018 (平成30) 年 10月21日	講道館	講道館・全柔連	スポーツ庁 日本柔道整復 師会 朝日新聞社	7	○	○	○	○	○	○	○	80	68	6	6	3	各種目上位3組 地区上位3組	35 (5)
22	2019 (令和元) 年 10月27日	講道館	講道館・全柔連	スポーツ庁 日本柔道整復 師会 朝日新聞社	7	○	○	○	○	○	○	○	97	68	13	16	3	各種目上位3組 地区上位3組	35 (5)
23	2022 (令和4) 年 6月11日	講道館	講道館・全柔連	スポーツ庁 日本柔道整復 師会	7	○	○	○	○	○	○	○	75	59	13	3	3	各種目上位3組	35 (5)



た。審査員の延べ人数は746名であった。

## V. 考察

全日本柔道形競技大会は、第1回大会が1997（平成9）年に開催され、2022（令和4）年までの間に23回実施された。開催されなかった年とその理由は、2007（平成19）年に講道館国際柔道形競技大会が開催されたため、2020（令和2）及び2021（令和3）年に新型コロナウイルス感染症の感染拡大により中止となったためであった<sup>37)・38)</sup>。第1回大会（1997）が開催されるに至った経緯やその理由について、嘉納行光講道館長は以下のように述べている。

講道館では毎年、夏期講習会第一部で「形」の講習を行っているが、一方、これとは別に「形」の普及発展のため、全国大会を考えたこともあった。しかし「形」の本質を考えた場合、その基本に忠実でなければならぬのは勿論であるが、ただ形式を真似ただけでは何の意味もなく、それぞれの個性から醸し出される味わい・深みといった芸術性を有する主観的内容が重要な要素となっているだけに、審査基準設定の難しさ、又、審査するもの自身が「形」を十分に修得し、評価について高い判断力を有することが強く要求されることから、今日まで実現に踏み切れなかった。このような状況の中で、今般、全日本柔道連盟教育普及委員会が現今の競技柔道偏重の趨勢を憂慮し、生涯柔道の一環として「形」の普及発展のために「形」の全国大会開催を強く提唱し、理事会、評議員会で検討後、講道館と協調して大会を早期に実現することを決定した。講道館としては、前述のように色々問題は有るが、趣旨自体に異存がある訳ではなく、まず実施することにより、経験を重ねながら問題を解決して、将来完璧な大会に充実発展させていくこととし、ここに講道館、全日本柔道連盟共催による第一回大会が開催される運びとなった次第である<sup>39)</sup>

第1回大会は、全柔連教育普及委員会から強い要望があり、理事会、評議員会で検討し、講道館と協調して実現されたと記されている。また講道館が形競技の全国大会の必要性を認識しながらも実施できなかった理由として、形の本質を損なわないための実施方法、審査基準の設定、審査員の育成などの問題が挙げられていた。しかしながら、最終的には実施する中で経験を重ね、前述の諸問題を解決しながら大会を充実発展させていく方針が固まり、大会開催に至ったことが窺える。こうした背景があったため、本大会の講道館と全柔連の両団体が本大会の主催団体に名を連ねていると考えられる。

開催月をみると、10月開催が15回（第4、6～15、19～22回大会）、9月開催が5回（第1、2、3、5、16回大会）、11月開催が2回（第17、18回）など、秋に開催されることが多かった。しかしながら、第23回大会は6月開催となり、中止となったが2020（令和2）年及び2021（令和3）年の大会も、6月開催の予定であった。6月開催へ変更した理由に関する資料は見当たらなかったため、世界形の開催時期と日本代表組の選考方法などから考えてみたい。表2は全日本柔道形競技大会の大会プログラムの巻末資料を参考に、筆者が作成した世界形の開催年等の一覧である。第1回大会（マルタ・2009）は10月、第2回大会（ハンガリー・2010）は5月、第3回大会（ドイツ・2011）は6月と不定期に開催されてきたが、第4回大会以降は9月または10月の秋に開催されるようになった<sup>40)</sup>。世界形と全日本形の開催時期を比べると、2022（令和4）年を除く全ての年で、世界形後に全日本柔道形競技大会が行われていた。



表2 世界柔道形選手権大会 開催年等一覧

回	開催年	月日	国名
1	2009	10月17-18日	マルタ
2	2010	5月24-25日	ハンガリー
3	2011	6月14-15日	ドイツ
4	2012	9月22-23日	イタリア
5	2013	10月19-20日	日本
6	2014	9月20-21日	スペイン
7	2015	10月19-20日	オランダ
8	2016	10月1-2日	マルタ
9	2017	10月6-7日	イタリア
10	2018	10月15-16日	メキシコ
11	2019	9月4-5日	韓国
12	2021	10月26-27日	ポルトガル
13	2022	9月13-14日	ポーランド

※「令和3年全日本柔道形競技大会大会プログラム」を基に著者が再構成した

会場は、第1回大会から第23回大会まで、全て講道館で開催された。参加者の動機づけという点では、柔道の総本山である講道館で開催することも有効であるが、開催地を変えることで地方の形普及を促進する可能性も考えられる。世界形は毎年開催国を変えており、第5回大会が2013（平成25）年10月19日～20日に京都市武道センターで開催された<sup>41)</sup>。この時、開催地枠として京都府代表が2組出場し、「講道館護身術」（取・宮本秀樹、受・渡辺正喜）で優勝、「固の形」（取・下野龍司、受・大館斗志爾）で2位など、上位入賞を果たした。下野・大館組は世界形が形競技のデビュー戦となり、その後も形競技を続け、第22回大会（2019）では同種目で初優勝を飾るなど活躍を見せている。

種目数の推移をみると、第1回大会（1997）のみ3種目であったが、第2～10回大会（1998～2006）は4種目、第11～23回大会（2008～2022）は7種目と種目数が増加している。種目数を増加できた背景には、試合場数を増やしたためと考えられる。1試合場での実施は第1～2回大会（1997～1998）のみで、第3～10回大会（1999～2006）は2試合場、第11～23回大会（2008～2022）は3試合場で実施された。徐々に大会運営が効率的になり、1試合場でしか実施できなかったものが、3試合場で同時進行できるところまで運営が充実してきた様子が窺える。種目の内訳をみると、第3回大会（1999）以降に「投の形」が毎年実施されるようになったが、その他の種目は第10回大会（2006）まで「極の形」「柔の形」「古式の形」と「固の形」「講道館護身術」「五の形」が交互に実施された。「投の形」のみ毎年実施となった経緯について、第3回大会（1999）の記事に「形全7種目を2年を掛けて昨年終了し、本年は第2順目の新たなスタートの年であった。それに伴い競技種目が再検討され、『投の形』が毎年実施されることになった。今年はその元年であった。『投の形』のみは毎年実施する、とした理由は、柔道乱取の基本として、その重要性が『実行委』で改めて認識されたからである<sup>42)</sup>」と記されている。第2回大会（1998）後の実行委員会にて種目が再検討され、乱取の基本として「投の形」が重要性であるとの認識の下、「投の形」が毎年実施となった経緯が窺える。

参加組数をみると、最も少なかった第1回大会（1997）は30組（60名）で、第22回大会（2019）ではその3倍にあたる97組（194名）が参加していた。年々増加傾向にある背景には、試合場数及び種目数の増加が大きな要因であると考えられる。地区枠とは、全国10地区（北海道、東北、関東、東京、北信越、東海、近畿、中国、四国、九州）が有する出場枠のことで、各地区は種目ごとに1組選手を出すことができる。但し、取と受は同じ都道府県に登録していることが条件になる。地区枠は3種目の場合は最大30組（3種目×10地区）、4種目は最大40組（4種目×10地区）、7種目は最大70組（7種目×10地区）となる。この地区枠をベースとし、さらに全国枠と推薦枠が新たに加わった。全国枠は第13回大会（2010）から始まった制度で、取と受の登録している都道府県が異なる場合でも、全国枠予選会に出場し70点以上を取った場合は全日本形の出場権を得ることができる。当時の大会記事には「出場者は今大会より全国10地区代表に加えて、地区を跨いでペアを組む場合のみ出場できる全国枠が設けられた。その選考会は、夏期講習会において、その日の当該種目の講習会が終了した後に行われ、投の形、柔の形各1組、古式の形2組の計4組が今大会への上場権を得た。これら新しい試みによる出場者が注目された」<sup>43)</sup>と記されていた。第13回大会（2010）では、「投の形」で坂本道人・横山喬之組、「柔の形」で大宮民子・竹淵典子組が準優勝、「古式の形」では井上康彦・米重清光組が優勝するなど、全国枠4組中3組が上位入賞の好成績を収めた。第16回大会（2013）では全国枠で出場した佐藤伸一郎・増地克之組が「五の形」で優勝した。坂本・横山組、佐藤・増地組はその後の全日本柔道形競技大会でも連覇を飾っており、全国枠は優秀な競技者に全日本柔道形競技大会への上場機会を与える上で有効に機能したと考えられる。

推薦枠は第14回大会（2011）から設けられた制度で、大会記事には「出場資格は昨年度新設された全国枠に加えて、新たに推薦枠が設けられた。推薦枠は2011年世界柔道形選手権大会に出場した組が、同じ形に出場する場合は推薦で出場できるものである。これによって地区枠10組、全国枠最大2組、推薦枠1組の最大13組となる」<sup>44)</sup>と記されている。世界形の代表組が同じ種目に限り全日本柔道形競技大会へ推薦で出場できるようになった。第14回大会（2011）には推薦枠で4組が出場し、全ての組が高得点で2位に差をつけて優勝を果たして面目を保った。第16回大会（2013）では「推薦枠での出場は2012年世界柔道形選手権大会で優勝した組および2013年アジア形柔道選手権大会の代表組が、同じ形に出場する場合に可能となる（中略）今回は推薦枠が設けられて3年目ということもあり、過去の世界柔道形選手権大会の優勝者すべての組が出場し、加えて投の形、固の形、柔の形の2013年アジア柔道形選手権代表組も出場しその結果が注目された。世界で4連覇している『柔の形』の横山・大森組に0.2ポイントと肉薄した白野姉妹の健闘は形合宿等の強化策の成果であろう。過去の世界柔道形選手権大会で優勝経験のある組の活躍も特筆に値する」<sup>45)</sup>など、推薦枠が広がり、世界形やアジア形柔道選手権大会の代表組も推薦で出場し、ハイレベルな戦いが展開されたことが窺える。第17回大会（2014）からは、競技順序の抽選について「推薦組はシードされ、6番目以降に配置された」<sup>46)</sup>とあるように、推薦組をシードする仕組みが設けられた。第18回大会（2015）からは「五の形」と「古式の形」も推薦枠に含まれるようになった。全国枠と推薦枠を新設したことにより、全日本柔道形競技大会の競技力強化の充実が図られたと考えられる。

また表彰制度の変更や入賞者を各種大会の演技者として推薦するようになったことも、修行者に動機づけにつながったのではなかったと考えられる。第1回大会（1997）から第4回大会（2000）

までの表彰は、各種目の上位2組と、地区による総合得点の上位2地区のみであった。第5回大会（2001～2019）以降は各種目の上位3組までが表彰されるようになった。上位2組までの表彰の場合、3種目では6名（3種目×2名）、4種目では8名（4種目×2名）と入賞者は10名以下であった。第11回大会（2008）以降は7種目開催で上位3名が表彰となり、21名が表彰されるなど、入賞者の人数が倍増した。第1回大会（1997）から参加組には参加証が与えられていたが、第9回大会（2005）で終了となった。その背景には、入賞者数の増加により、参加証配布による動機づけの必要性がなくなったためではないかと考えられる。

審査員数をみると、第2回大会（1998）が40名（1種目10名）と最も多く、第11回大会（2008）以降は35名（1種目あたり5名）であった。大会初期の方が審査員数が多かった理由は、行光館長が第1回大会の開催経緯について述べたように、大会を重ねる中で形競技の実施方法、審査基準の設定、審査員の育成などの諸問題に慎重に取り組んでいく意図があったためと考えられる。第1回大会（1997）の表彰では「1位、2位以下の順位は決めるが、発表はしない」<sup>47)</sup>など、順位となる点数の開示をしないことが明記されていた。また第3回大会（1999）では審査方法に「尚、審査員の採点基準調整のため、各形とも、演技の最初3組迄は採点表を各審査員の手許に置き、どの形も4組目の演技からその都度、採点表を集めることにした」<sup>48)</sup>と記され、大会前日に審査員会議を実施しているが、大会当日も採点基準の調整を行うなど、慎重な姿勢が続けられた。慎重にならざるを得なかった理由としては、競技規定の制定が遅れていたことが挙げられる。講道館柔道形競技規定は第1回大会（1997）から16年後の2013（平成25）年4月1日に施行され、第16回大会（2013）から実施された<sup>49)</sup>。全日本柔道形競技大会は慎重に実績を積み重ね、出場枠や表彰の拡充や競技規定の制定など、システムの充実が図られ、形の普及と強化を兼ねた競技大会としての体裁を整えていったと言えよう。

## VI. まとめ

今回の調査の結果、全日本柔道形競技大会の特徴を3期に分けて捉えることができる。

1期は第1～10回大会（1997～2006）で、形競技の前例がない中、参加者や試合場は最小の規模で、最も多くの審査員を配置し、演技の進め方や評価について慎重に進め、形競技大会の地固を行った時期であった。2007（平成19）年には第1回講道館柔道「形」国際競技大会が開催され、形競技が国際化され、「形競技の日本代表」という新しい道が広がったことが、国内の関係者にも認識されるようになった。2期では試合場数、種目数、参加組数を増やすなど、大会規模の拡充と共に、当初から懸案であった競技システムの整備が図られた。全国枠と推薦枠の新設により、優秀な競技者をさらに全日本柔道形競技大会に呼び込むことが可能になり、新たなチャンピオンを輩出し、世界形等の国際大会で優秀な成績を取めた。2012（平成24）年には公認柔道形審査員制度、翌年（2013）には講道館柔道形競技規定が設けられ、形審査員の道も一般修行者に開かれるようになった。

3期はコロナ禍において始まったばかりで、世代交代やデジタル化が予想される。感染拡大防止のため、2020（令和2）及び2021（令和3）年の全日本柔道形競技大会及び公認形審査員試験は中止となったが、公認形審査員研修会<sup>50)</sup>や形強化選手を対象とした強化合宿<sup>51)</sup>がオンラインで実施された。新型コロナウイルスの感染状況にもよるが、得点集計や掲示にも、3密や接触を避けるため、世界形のようなタブレットとモニターを用いて競技係員数や接触の機会を減らすなど、スリム化が進むことが予想される。第23回大会（2022）では、4種目（「投の形」「極の形」「五

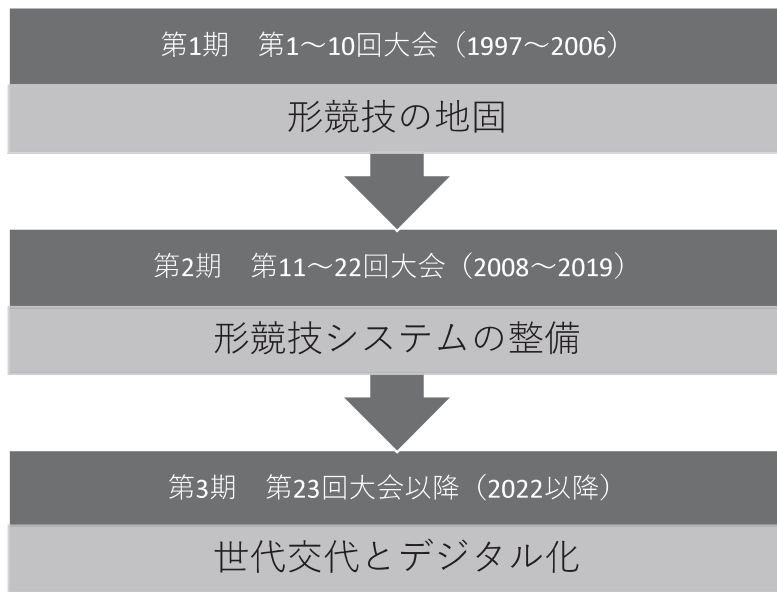


図1 全日本柔道形競技大会の期分け

の形」「古式の形」)で新チャンピオンが生まれるなど、世代交代が顕著であった。会場では、前大会まで選手であった修行者が、選手の引率をしたり、審査員を務めていたりする場面が散見された。2期までに増えた形競技を「する」側の人々が、厳しい競技生活を終えて「見る」「支える」側へ進むことは、形競技の普及と振興の上で大きな力になるものと期待される。

形競技の基礎資料作りが進むことで、研究や批判の活性化を促すことが期待される。今後は国際大会の実態把握、国内外の競技規定の異同やその制定過程の検証、形競技者や種目の特性など、1つ1つ調査を進め、形の普及・振興に寄与する資料を作成していきたい。

## 文献

- 1) 嘉納治五郎講述・落合寅平筆録 (1927)：柔道家としての嘉納治五郎 (十二)，作興6 (12)：87.
- 2) 小侯幸嗣 (2011)：当世形事情，柔道82 (5)：1-4.
- 3) 大島修次 (2015)：柔道「形」国際普及と競技化に関する考察—第1回講道館柔道「形」国際競技大会から世界柔道「形」選手権大会まで—，国際武道大学研究紀要39：109-115.
- 4) 毛利修 (2016)：柔道「形」の競技化について考える，柔道87 (3)：71-73.
- 5) 講道館：平成9年全日本柔道形競技大会要項，柔道，68 (8)：70-71，1997.
- 6) 村田直樹：全日本柔道形競技大会，柔道，68 (11)：4-11，1997.
- 7) 講道館：平成10年全日本柔道形競技大会要項，柔道，69 (8)：64-65，1998.
- 8) 村田直樹：全日本柔道形競技大会，柔道，69 (11)：17-23，1998.
- 9) 講道館：平成11年全日本柔道形競技大会要項，柔道，70 (8)：62-63，1999.
- 10) 村田直樹：全日本柔道形競技大会，柔道，70 (11)，4-11，1999.
- 11) 講道館：平成12年全日本柔道形競技大会要項，柔道，71 (8)：72-73，2000.
- 12) 村田直樹：全日本柔道形競技大会，柔道，71 (11)：49-54，2000.
- 13) 講道館：平成13年全日本柔道形競技大会要項，柔道，72 (8)：80-81，2001.



- 14) 村田直樹：全日本柔道形競技大会，柔道，72(11)：5-11，2001.
- 15) 講道館：平成14年全日本柔道形競技大会要項，柔道，73(8)：74-75，2002.
- 16) 村田直樹：全日本柔道形競技大会，柔道，73(12)：26-33，2002.
- 17) 講道館：平成15年全日本柔道形競技大会要項，柔道，74(8)：70-71，2003.
- 18) 村田直樹：全日本柔道形競技大会，柔道，74(12)：13-20，2003.
- 19) 村田直樹：全日本柔道形競技大会，柔道，75(12)：13-19，2004.
- 20) 村田直樹：全日本柔道形競技大会，柔道，76(12)：14-20，2005.
- 21) 尾形敬史：全日本柔道形競技大会，柔道，77(12)：24-29，2006.
- 22) 菅波盛雄：全日本柔道形競技大会，柔道，80(1)：61-67，2009.
- 23) 菅波盛雄：全日本柔道形競技大会，柔道，81(1)：67-76，2010.
- 24) 菅波盛雄：全日本柔道形競技大会，柔道，82(1)：96-106，2011.
- 25) 菅波盛雄：全日本柔道形競技大会，柔道，83(1)：85-95，2012.
- 26) 菅波盛雄・桐生習作：全日本柔道形競技大会，柔道，84(1)：78-88，2013.
- 27) 菅波盛雄・小崎亮輔：全日本柔道形競技大会，柔道，84(12)：50-62，2013.
- 28) 桐生習作・小崎亮輔：全日本柔道形競技大会，柔道，86(2)：91-99，2015.
- 29) 桐生習作：全日本柔道形競技大会，柔道，87(2)：83-91，2016.
- 30) 桐生習作：全日本柔道形競技大会，柔道，88(1)：26-33，2017.
- 31) 桐生習作：全日本柔道形競技大会，柔道，89(1)：13-19，2018.
- 32) 桐生習作：全日本柔道形競技大会，柔道，90(1)：14-20，2019.
- 33) 講道館：訂正とお詫び 平成30年全日本柔道形競技大会順位変更（平成31年1月号），柔道，90(3)：52，2019.
- 34) 桐生習作：全日本柔道形競技大会，柔道，91(1)：33-39，2020.
- 35) 桐生習作：全日本柔道形競技大会，柔道，93(8)：68-74，2022.
- 36) 大島修次（2015）：柔道「形」国際普及と競技化に関する考察—第1回講道館柔道「形」国際競技大会から世界柔道「形」選手権大会まで—、国際武道大学研究紀要39：114.
- 37) 全日本柔道連盟（online）【中止】令和2年全日本柔道形競技大会（20.10.25）. <https://www.judo.or.jp/tournament/3231/>（参照日2022年11月17日）.
- 38) 全日本柔道連盟（online）【中止】令和3年全日本柔道形競技大会 大会プログラム掲載（22.2.6）. <https://www.judo.or.jp/tournament/8890/>（参照日2022年11月17日）.
- 39) 嘉納行光：平成9年全日本柔道形競技大会プログラム：1，1997.
- 40) 全日本柔道連盟（online）【中止】令和3年全日本柔道形競技大会 大会プログラム掲載（22.2.6）. <https://www.judo.or.jp/tournament/8890/>（参照日2022年11月17日）.
- 41) 全日本柔道連盟（online）第5回世界形選手権大会（日本・京都）大会結果（13.10.19-20）. <https://www.judo.or.jp/tournament/5780/>（参照日2022年11月17日）.
- 42) 村田直樹：全日本柔道形競技大会，柔道，70(11)，9，1999.
- 43) 菅波盛雄：全日本柔道形競技大会，柔道，82(1)：96，2011.
- 44) 菅波盛雄：全日本柔道形競技大会，柔道，83(1)：85，2012.
- 45) 菅波盛雄・小崎亮輔：全日本柔道形競技大会，柔道，84(12)：50-62，2013.
- 46) 桐生習作・小崎亮輔：全日本柔道形競技大会，柔道，86(2)：92，2015.
- 47) 村田直樹：全日本柔道形競技大会，柔道，68(11)：7，1997.

- 
- 48) 村田直樹：全日本柔道形競技大会，柔道，70 (11)，5，1999.
- 49) 菅波盛雄・小崎亮輔：全日本柔道形競技大会，柔道，84 (12)：52，2013.
- 50) 全日本柔道連盟 (online) 公認形審査員オンライン研修会 受講について. <https://www.judo.or.jp/news/171/> (参照日2022年11月17日).
- 51) 全日本柔道連盟 (online) オンライン形強化合宿開催のお知らせ. <https://www.judo.or.jp/news/9559/> (参照日2022年11月17日).